

第15期教学研究所 開所式 教学研究所所長挨拶

この度、所長を拝命致しました北第3組即信寺の亀谷です。

皆様には、第15期教研に入所されましたこと、心から御祝いを申し上げます。第15期はスタッフ6人。研究員17名。そして聴講生4名。うち女性お二人という布陣で今日から歩み出すこととございます。今回の教研も多くの方々が採用に至らず、皆さんがこうして入所を許可されたこととございます。そのことをまずお心に留めていただきたいと思います。

今から42年前に北海道教学研究所はこの北の大地に産声をあげました。志深い先輩達が寄り集まり、ご相談され、大変なご苦労の上に生み出されたのが北海道教学研究所です。若いお坊さんが仏法に自身を問う場を持って欲しいという願いのもと、第1期の教研所長に仲野良俊氏を迎え、真摯な求道を願ってスタートいたしました。以来42年間、教区の方々の願いと、物心両面の支えによって今日まで歩んできたことです。

ここに歴代の所長のお言葉を紹介して訓示とさせていただきますと思います。私は5期の教研の研究員でしたが、その時、仲野先生が専任講師として講義をもたれていました。仲野先生は第5期の教研生に「今回は放っておくと勉強しない者ばかりを集めた」と言われました。「放っておくと勉強しない者」、しかしそれは裏を返せば、関わりを持ったら歩んでくれるはずだ、そう願って教研に入ってもらったということでありましょう。

先般、第14期でよく勉強をされた方にお会いしましたら「教研終わって4か月、1度も聖典を開いていません」こう言われました。そういう私たちが少なくとも3年間、聖典を開きお聖教が語りかけてくれる言葉に真摯に耳を傾ける、そういう場を持ってほしい。そういう場にいたらあなたは必ず勉強してくれるはずだ。そういう願いがみなさんと私たち所員にかけられています。

第7期から9期まで所長を勤められた畠山先生は、「北海道教学研究所とは学者を育てるのでも、布教使を育てるのでもない。自らが念仏者たらんと歩んでいるかどうかを問いつける場が教学研究所だ」このように言われました。実は、この言葉が「北海道教学研究所は念仏者を生み出す場所だ」と誤解されることがあります。これはとんでもない話で、反対です。むしろ私たちは一人では念仏者顔をしてしまいます。一人でいるとわかった顔をして門徒さんの上に君臨したい根性にかられます。そこを問いかけるのです。念仏者ヅラをしてないか、念仏者たらんと歩んでいるかどうか。そう問いかける場が教学研究所ではないかと思えます。そういう意味で、お互い胸襟を開いて語ってほしいことです。先生たちも厳しい言葉を発するかもしれません。それも、「ともに念仏者たらんと歩もう」という願いの表れだと思っていただきたいと思います。

10期11期と勤められました楠先生は、「この教研の3年間を通してスタートラインに

立てるかどうかだ」と言われました。「それはどういうことですか?」と聞いた教研生に対して先生は「君たちはまだスタートラインにも立っていない」と言われました。スタートラインに立つということは、なんにもわかってない自分に身を据えるということだと思います。私たちはわかったふりをしたい、そういう意味で私も一言つけ加えさせていただければ、この三年間にどれだけ握っているものを離せるか、そういうことなんじゃないでしょうか。仏教は執からの解放をもって救いといたします。しかし私たちは、覚えて握ってため込んで、立派なものになろうとします。それはむしろ教研の願いとは逆行するものであります。握ったものを離すということは、全部放り投げるということではなく、握ったものが頼りにならないことがわかるということです。握ったものから手を離せば今まで積み重ねてきたものが本当に光り出すのでしょうか。それを握っている限りは、積み重ねてきたものが、逆に自分を縛るものとなるのではないのでしょうか。そして握り続けるときに人は一人ぼっちになります。握り続けるときは友がいなくなります。なによりも南無阿弥陀仏に出遇えないのです。握ったものを離れたときに、私を心配してくださっていたはたらきの中にあっただなということがあるのではないかなと思います。

前期所長の巖城先生は一言「少年老い易く学成り難し、一生過ぎ易し、三年間はあっという間です。」と時の経つ速さをおっしゃいました。あっという間の三年間です。身を据えて念仏者たらんと歩んでいるかどうか、スタートラインが見えているかどうか、握りこんでいないかどうかを問いつづけながら歩んでいただきたいと思います。

最後にいつも申し上げるのですが、この三年間の研修には莫大な予算が計上されております。今日ちょっと風は大丈夫ですかね。この雨と風で多くの農家の方が被害を受けられたと思います。余市は果樹の町ですのでリンゴとブドウが悲惨な目に合っています。今日皆さんがここで学ばれるその予算を支えているのは、そういう中で大変なご苦勞をされている人の財布の中から出ているということ、肝に銘じたいと思います。三年間どうぞよろしくお願いいたします。

2015年10月13日

第15期北海道教学研究所所長 亀谷 亨